

プロサッカークラブにおける地域密着度に関する研究

A study on Community Relationship Scale of Professional Football Club

1K04A250-0

横山 知伸

指導教員

主査 木村和彦先生

副査 堀野博幸先生

【緒言】

1992年に日本のプロサッカーリーグ、Jリーグが開幕した。Jリーグは明確に断言したわけではないが地域密着を初めて概念として方針に打ち出した。近年、この地域密着というフレーズは他のスポーツ種目でも謳われるようになった。そこで、クラブの地域密着を目的としているJリーグクラブの現状が果たしてどのようなものなのか。各クラブがどのくらい地域に密着しているのかを知りたい。

といった動機から、この研究を開始した。目で見ることのできない地域密着度を独自の観点から数値という形で可視的にする。対象をJリーグ所属の31チームとし、その数字から各項目の問題点、各クラブの問題点・あり方を考察する。

【方法】

地域密着度を測る尺度として、先行研究(永井氏2006年)を参考に Out put(クラブが提供するサービス)、In put(ホームタウンの人々が供給してくれるモノ)という2視点の10項目を採用して可視的なものにした。Out putは巡回サッカー教室件数と参加人数、栄養教室などの講演件数と参加人数、サッカー以外のスポーツチーム所持数、年間動員数/ホームタウン人口、ホームスタジアム収容率の5項目。In putは全スポンサー企業/ホームタウン企業、地元出身選手・監督/クラブ登録選手数、自ユース出身選手数/クラブ登録選手数、ファンクラブ会員数/ホームタウン人口、入場料収入の5項目。以上10項目。以上のデータを収集して、結果はMicrosoft Office Excel2003を使った。各項目の平均・標準偏差・標準得点を出した。最終評価では各クラブ全10項目の平均値を算出してグラフ化した。

標準偏差 = STDEVP(対象となる数値)

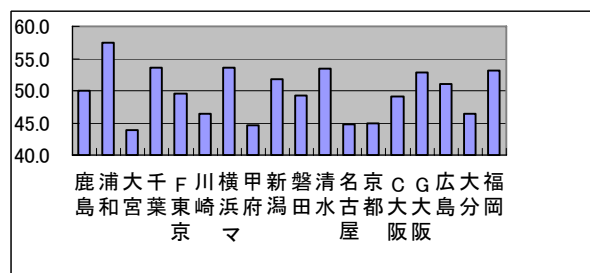
標準得点 = (対象の数値-平均) × 10 ÷ 標準偏差 + 50

巡回件数・人数、講演件数・人数、スポーツチームの所持数、ホームタウン内スポンサーの割合、ファンクラブ会員数は各クラブに質問紙を郵送。年間動員数/ホームタウンない人口、ホームスタジアム収容率、地元出身選手・監督の割合、自クラブユース出身選手の割合、入場料収入はインターネットを使用して作成した。

【結果】

2006年度J1所属クラブの中で、最も総合得点が高かったのは57.5をマークした浦和レッズであった。入場料収入で断トツの数値を記録した。その他のユース出身選手の割合、スタジアム収容率といった項目でも高い数値を記録した。この年のリーグ戦制覇が大きな影響を与えていたと思われる。

J2所属クラブでは東京ヴェルディ1969が57.8でトップだった。その中でも、自クラブユース出身選手割合、ホームスタジアム収容率は70点後半の高得点を出している。もともとJ1所属時は人気のあったチームである。そのためJ2に降格しても昔ほどではないが人気はある。2006年度J2を優勝してJ1昇格を決めた横浜FCはさほど数値が高くなかった。数値ではJ2の下から3番目であった。下の図はJ1所属クラブの総合得点である。



【まとめ】

J1クラブでは結果から総合得点で上位クラブと下位クラブでは得点に大きな差があった。1番差が開いた項目は入場料収入であった。浦和レッズは2位のアルビレックス新潟を大きく突き放している。実数で浦和レッズが2531であるのに対してアルビレックス新潟は994であった。単位は百万円。2倍以上の開きがある。

結果で目についたのは特徴のないクラブは総合得点でも低い数値であった。特徴のないクラブはまずはホームタウンに Out put をすることが先決である。

J2クラブでは全体的に数値が低くレベルアップが必要だと思われる。提供しているサービスの中身を見直す必要がある。もともとJ1に所属していたクラブは高得点を出していた。ザスパ草津・愛媛FC・横浜FC・徳島ヴォルティスといった参入して間もないクラブは数値が低かった。今後の発展が求められる。